二次元ぷち文庫

見習い退魔師 イレーネ 淫獄の洋館

天草白

表紙イラスト：明地雫

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『見習い退魔師イレーネ　淫獄の洋館』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

見習い退魔師
イレーネ
淫獄の洋館
天草白
表紙／明地雫
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

イレーネ・サハロフ

ロシア出身のブロンドの退魔師「見習い」少女。退魔師修行のために日本に多岐神立夏のもとへ留学している。日本のアニメ好き。

多岐神立夏（たきがみりっか）

『多岐神探偵事務所』のオーナーで、ゴースト絡みのトラブル解決を仕事にしている女退魔師。イレーネの師匠であり、彼女へのセクハラを生きがいにしている美女。

繁華街の一角にある雑居ビル。その一室――。

「ち、ちょっと、どこ触ってるんですか！　……ああんっ」

イレーネ・サハロフは年ごろの女子校生らしからぬ艶めかしい喘ぎ声を上げた。

黒いリボンで束ねたサイドポニーの金髪。翡翠色をした切れ長の瞳。北欧系に特有の怜悧な美貌は、まるで氷の妖精のようだ。

その顔は今、鮮やかな薔薇色に紅潮していた。

「や、やめてください……はぁうっ⁉」

制止の声も空しく、ほっそりとした指が白い制服の胸元に滑りこんできた。そのままブラジャーの上から乳房を揉みしだかれる。

むぎゅっ、むぎゅぅうっ。

日本人とは明らかに発育の異なる、もぎたてのメロンを思わせる豊満なバストは柔らかさと強い張りを兼ね備えていた。

白いブレザータイプの制服越しに細い指がずぶずぶと沈んでいく。初々しい乳房にジンと甘酸っぱい痺れが走った。

同性ならではの、女のツボを心得た揉み方――。

「よいではないか、よいではないか」

イレーネのグラマラスな肢体を好き放題に弄り回しているのは、彼女より幾分年上の美

しい女だった。

「こ、これだから日本人は……ああんっ」

勝気に言い返すものの、乳房を揉みしだかれるたびに、不覚にも力が抜けていく。

気持ちいい――。

思わず、危ない趣味に目覚めてしまいそうなほど、その指遣いは巧みだ。

「ふふ、いい顔だぞ、イレーネ。ああ、たまらない……じゅるり」

高い位置で結わえたポニーテールがどことなく侍を連想させる、純和風の美女。

清潔感のある白いブラウスとタイトスカートが、スレンダーな体つきによく似合う。

「どうだ、このまま禁断の世界に突入というのは……ふふふ」

彼女――多岐神立夏はイレーネの上体を抱きすくめた。かぷっ、と耳たぶを咥えながら囁く。

巧みに強弱をつけて胸元を揉まれれば揉まれるほど、脳髄が妖しく痺れる。意識までもが薄れていく。

さらにもう一方の指は黒いプリーツスカートや、同色のガーターストッキングに包まれた太ももの表面を這い回りながら、徐々にその付け根へと――。

「ちょ、や、やめてください、立夏さ……こらっ、やめろー！」

ハアハアと息を乱しながら、イレーネはなんとか立夏から体を離した。

「やめろとは大層だな。私は君の師匠だぞ。もっと敬意を払いたまえ」
「セクハラしながら……はあ、はあ……け、敬意を払え、とか言われても……」
「これが日本の文化だ」
「謝れ。日本の全国民に謝れ」
「あ、あの、『多岐神探偵事務所』ってここでいいんでしょうか……」
ドアの入り口のところから、遠慮がちな声が聞こえた。
イレーネと同い年くらいだろうか、古風なお下げ髪の少女が立っている。イレーネの通う女子校とは違う、セーラー服姿。
眼鏡の奥の瞳が戸惑ったように揺れていた。
……まあ、いきなり美少女と美女の淫らな絡みを見せられては戸惑うのも無理はないが。
「あら、あなたは――」
「四時から相談の予約をしていた須藤ですけど……」
「ほう、君が依頼人か。よく来たな。可愛い子は大歓迎だ」
「立夏さん、セクハラはダメですからね」
イレーネが釘を刺した。
「失敬な。人をセクハラ魔人のように」
「セクハラ魔人でしょう」

「言われてみれば否定できんな」
「せめて、言葉だけでも否定してよ！」
可愛い女の子を前にした立夏は、しっかり見張っていないと何をしでかすか分からない。
「あの、えっと……この事務所が悪霊とか、そういうことに通じていると噂で聞いたもので……相談したくて、その」
（この子、そっちの依頼か）
イレーネの表情が少し険しくなった。
表向きは探偵事務所となっているが、ここの裏の仕事は――悪霊退治。
立夏とイレーネはその専門家である『退魔師』なのだ。
（まあ、立夏さんは退魔師としては超一流なんだけど。……これでセクハラ癖さえなければ理想的な師匠よね、まったく）
はあ、と内心でため息をつく。
彼女は立夏に師事する退魔師見習いだった。
ロシア出身のイレーネは、立夏の元で退魔師の修行をするため、一年ほど前から日本に住んでいる。
交換留学生として都内の私立学園に通う一方で、退魔師見習いとして退魔師ギルドに所属。ギルドの依頼によって、ときには師匠とともに、ときには単独でゴースト退治を行う

日々を送っていた。
「ん、もちろんだ。悪霊退治から性のお悩み相談までなんでも受けつけるぞ」
「妙な業務を追加しないでください」
「さっきからいちいち口を出すな、君は」
「出さざるを得ないことを言ってるからでしょ」
イレーネが美人師匠をにらむ。
「えっ、せ、性？　わたし、あのその……」
ふええ、と口ごもりながら、あたふたとする少女。
確かに、可愛らしい。
……もちろん立夏のような妖しい意味ではないが。
と、少女が二人を交互に見つめ、
「あの……ところで、お二人はそういう関係なのでしょうか、どきどき」
「ち、違うわよ」
とんでもない誤解をされていたらしい。
「だって、あんなに仲睦まじく――」
「あれのどこが仲睦まじいのよ⁉」
「わたし、百合は正義だと思います」

「おお、君もそう思うか。そうだよな。百合は正義、百合は法律、百合こそが唯一絶対の真理――」
「いいかげんにしてっ」
イレーネが怒鳴った。
ハアハアと先ほどよりもさらに息を荒らげる。
「これじゃ話が進まないじゃない」
「そうカリカリするな。ストレスが溜まっているならスッキリさせてやってもいいぞ？おもに性的な意味で」
「……遠慮します」
「むう、最近新しく開発したフィンガーテクニックがあるのだが」
「いい加減そっち方面の発想から離れてください」
イレーネはもう一度内心でため息をついたのだった。

――少女は、須藤美智子（すどうみちこ）と名乗った。
須藤家といえば、この付近で少しは名の知れた素封家だ。
町の郊外に洋館を構え、大勢の使用人を従えて暮らしているという。

数日前、その洋館に妖魔が現れて使用人たちを皆殺しにし、そのまま巣食っているというのが、美智子の話だった。
今も洋館は妖魔とゴーストの巣窟と化し、父母の安否も不明だとか。
「警察に相談したのですが、なぜかほとんど調べもせずに自殺扱いで処理されてしまって……」
「人の認識を操る能力を持っているのかもしれんな。だとすれば、それなりの力を持った妖魔、ということになる」
「妖魔相手に警察ではだめだと思ったんです。頼れるのは、やっぱり専門家だけだと思って……やっとここを見つけました」
「では、父母の安否確認と妖魔退治が今回の依頼内容か」
ひとしきり話を聞き終わり、立夏がうなずいた。
「お父さま……お母さま……ああ、どうしてらっしゃるのかしら」
さめざめと涙を見せる美智子。
立夏は眉間をわずかに寄せ、それから首を左右に振った。
「だが私は今、別件で手が塞がっている。君の依頼には応えられそうにないな」
「そんな。さっき、依頼ならなんでも受けつけるって——」
美智子は悲痛な顔で叫んだ。

「こ、今度は何をする気なのよ」
「カカカ……いつまでもそんなに濡らしたままでは辛かろう。今からワシがたっぷりと満たしてやろうというのだ」
空中に持ち上げられた状態のイレーネの股間が、ちょうど妖魔の顔の位置にあった。
ふたたびショーツのクロッチ部を横にずらされると、ヌメヌメとしたものがぴっちりと閉じた二枚の花びらの表面を這った。
いやらしい割れ目に沿って、柔らかな舌肉が何度も行き来する。
ちゅく、くちゅっ……。
唾液の音が思ったよりも大きく鳴り響き、憎らしい妖魔に秘所を舐められているという現実をより強く認識させる。
人間に仇をなす妖魔――退魔師にとっての敵。そんな相手に乙女の処女地を舐めしゃぶられ、弄ばれているのだ。
自分の身に起きていることが信じられず、意識が薄くかすれた。
「はう……んっ！」
そんなイレーネの目を覚ますように、尖った舌先がクレヴァスを割って入りこむ。未通の場所に初めて受け入れた異物感。熱い舌が濡れた膣洞に滑りこみ、奥にあるピンク色の襞をくすぐった。

ちょっとシーン 試し読み スターts

入り組んだ襞肉の形状を確認するかのように、ぞろり、ぞろり、と丁寧に舐め回す。
「だ、ダメ……」
イレーネは恥ずかしさに喘いだ。
サルタヒコは荒い息を漏らしながら、なおも舌を押し入れてくる。
ちゅぷ、れろ、れろぉっ……ずるっ、ずるぅぅぅぅっ……。
濡れた秘部にヌメリのある舌肉が侵入してくる感覚は異様の一言だった。
金縛りにあったままの下肢が、びく、びく、と細かく痙攣する。
生硬な粘膜をほぐすようにして、少しずつ奥へ奥へと――。
ヌルヌルとした唾液を塗りつけられ、舌の腹で膣壁を甘く圧迫されて、腰の奥がぼうっと火照る。
繊細な膣粘膜が恐怖と快美の中間で震えていた。
「んっ、ふあっ……あ、アソコ、舐めちゃ……いやぁ……ああっ」
妖魔に陰部を舐められ、内部への侵入まで許しているというシチュエーションに怖気を覚えながらも、絶妙の圧迫感で無垢な膣を刺激され、じわじわと甘痒い肉悦が湧き上がってくる。
じゅぷ、ぐちゅっ……。
後から後から染み出した愛液が舌で撹拌される音が耳朶を打った。

（あたし、すごく濡れてる。どうして……!?）
ほとんど未経験のクンニリングスが、少女の性感を急速に掘り起こし、目覚めさせていく。
「ダメ……あ、ううっ……そ、それ以上されたら……！」
イレーネはサイドポニーにした金髪を揺らし、小さく喘いだ。
「あたしの体、ヘンになっちゃう……あうんっ……ば、バケモノにされてるのに……はあっ、はあっ、気持ちよく……ああ、ダメ！　ダメェ……！」
と、長い舌が侵入の途中で動きを止めた。
「ふん……舌などで膜を破っては面白くない」
言って、舌を引き抜くサルタヒコ。
にやにやと笑いながら、イレーネを見つめる。
「っ……！」
美少女退魔師は火を噴くような視線をサルタヒコに叩きつけた。
「そう物欲しそうな顔をしなくても、すぐに女にしてやる」
「誰がお前なんかにっ！」
「カカカ……そのザマでいくら喚こうが無駄だ」
サルタヒコはふたたび顔を近づけてきた。
ふたたび性器を舐められるのかと身を固くするが……今度は違った。

秘所に近づいてきたのは妖魔の唇ではなく、鼻。
黒光りする天狗の鼻が、ぴたり、と肉溝の中央にあてがわれたのだ。
これから妖魔が何をしようとしているのかを悟り、背筋がゾッとなった。
「いや……やめて」
さすがの勝気なイレーネも、間近に迫った貞操の危機に顔を青ざめさせる。
全身から血の気が引いていた。
肌に、寒気がする。
こんなおぞましいバケモノに初めてを奪われようとしている――。
暗い絶望感が女子校生退魔師の胸の奥を押しつぶす。
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
次の瞬間、すさまじい圧迫感が股間に押し入ってきた。
ずぶぅぅっ……！
処女の入り口に照準を合わせた切っ先が、濡れた花びらをかき分けて入ってきた。
みち、みち、と未通の膣壁を強引に押し広げられていく感覚。
入ってはいけないものが侵入してきている――。
おぞましさで全身が粟立ち、毛羽立った。
「あっ、ぐ……ううっ、ぐぅ……んんっ」

生まれて初めて味わう圧迫に、イレーネは苦鳴を漏らした。
これ以上入ってこないように腰をひねろうとしたが、自分の意志ではまったく動かせない。
腕も、足も、同じだ。
大切な乙女の純潔を今まさに奪われようとしているのに、ほとんど指一本動かせない状況が歯がゆかった。
（ダメ、バージンじゃなくなっちゃう！）
諦めと絶望が入り混じり、目の前が真っ暗になる。
ずぶぶぶっ……。
天狗の鼻はさらに押し進み、膣洞の中でも一際狭くなった地点でいったん動きを止めた。
膣の中にある処女膜は、ドーナツ状の窄まりになっていると聞いたことがあるが、まさにその場所を硬い先端部で撫でられているのが実感できた。
「いよいよ、だな。生娘ともこれでお別れだ」
サルタヒコがほくそ笑む。
「くっ……！」
歯噛みしてそれを見下ろすことしかできないイレーネ。
「カカカ、いい顔だ！　ようく覚えておけ。お前の記念すべき初めての男は、このワシだ

ということをな！　そうら！」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
みちぃぃっ！
体の深奥で何かが擦り切れたのが分かった。
ずっと守り抜いてきた純潔を失った瞬間――。
怒りでも、悲しみでもなく。
頭の中が真っ白になり、思考が停止する。
「あぁぁ……」
だらしなく開いた唇の間から、我知らずうめき声が漏れた。
とうとう奪われてしまった。
とうとう喪ってしまった。
自分はもう処女ではなくなったのだ――悲痛な喪失感が心の中心部にズキリと突き刺さる。
それも性器ですらない、バケモノの鼻によって乙女の純潔を奪われてしまった。
ツーッと内腿をヌルリとしたものが伝い落ちた。見下ろせば、無残に押し広げられた膣孔の縁からピンク色の血が一筋滴っている。
イレーネが生娘だった時代と別れを告げた、決定的な証。

「カカカ！　やはり処女だったな。どうだ、奪ってやったぞ！　このサルタヒコ様がお前を一人前の女にしてやったのだ。感謝するがいい！」
愉快げに哄笑する妖魔を、イレーネはぼんやりと見下ろしていた。
失ってしまったショックが大きすぎて、まだ頭の中が麻痺している。
しかし股間を襲う沁みるような痛みが、徐々にその麻痺から意識を覚醒させていく。
（嫌……！　あたし、本当にこのバケモノにバージンを……奪われて……ああっ）
サルタヒコは首を上下させ、天狗の鼻ペニスを少しずつ出し入れし始めた。
「んんっ……はぅんっ！」
じく、じく、と処女を失ったばかりの粘膜に痛みとも痺れともつかない沁みるような刺激が走り抜ける。
舌の侵入を受けたときとは違う、ツルツルとした『棒』の感触。
初めて受け入れさせられた固い異物で体の内側を摩擦されるのは、今までの人生で一度も味わったことのない異様な感覚だった。
深く突き入れられると、腹の底にズンと響く。
「きつ……いっ！　うぐぅ！」
奥歯を噛みしめてその衝撃に耐えた。
サルタヒコはイレーネをいたぶるようにゆっくりと顔を上下させ、鼻ペニスの出し入れ

を続ける。
ぐちゅっ、ぐちゅっ、と内部に溜まった蜜と破瓜血がかき出され、結合部から飛沫となって飛び散った。
妖魔の体の一部が胎内に潜りこみ、かき回す。イレーネは抵抗できない膣穴で受け止めるしかない。
しかし、それは意外にも不快感ではなく、むしろ——。
(まだちょっと痛いし、沁みる……けど。でも)
膣内が甘く疼き始めていた。
ツルツルとした鼻ペニスで内壁を引っかかれるたびに、ジンとした熱さが込み上げて腰骨の辺りにまで心地よく響く。
(気持ちいい、の? 嘘よ、こんな……)
「どうだ、気持ちよくなってきたか? んん?」
一打ちごとに微妙に角度を変え、妖魔は嘲笑混じりにイレーネの内部を責める。
「だ、誰がっ……気持ちよく、なんて……」
言いかけて、結局反論の言葉を呑みこんでしまう。
出し入れされればされるほど、次第に破瓜の痛みが薄らぐ。それと入れ替わるように異様な感覚が湧き上がってくるのだ。

じゅぷっ、じゅぷっ、ぐちゅっ、じゅぶぅぅぅぅっ！
唇から涎を、秘唇から愛液を、そして両方の結合部からはカウパー液を飛び散らせながら、イレーネは妖魔とゴーストによる抽送を浴び続けた。
「さあ、お前たちも来い。この素晴らしい体を存分に味わおうではないか！」
サルタヒコの呼びかけに、ゴーストたちがいっせいに雄たけびを上げた。
次々と降下したゴーストたちが、イレーネの周囲にまとわりつく。
股間のペニスは一様に勃起し、美少女退魔師に向かって鎌首をもたげていた。
あるいは、生きている人間以上に強烈な欲情――。
それらに囲まれ、つい先ほどまで性経験すらなかった乙女は怖気を覚える。
（こ、こいつら、まさか……いっせいにあたしを犯すつもり⁉）
さすがのイレーネも恐怖に身をすくませる。
次の瞬間、
「Wooooooooooooooooooooooooo！」
ゴーストたちの欲望にたぎる雄たけびが響き渡った。
全身から淫らなオーラを発散し、半透明のゴーストたちがイレーネの半裸身に殺到した。
ヌルヌルとした粘液に覆われた先端部が、剥き出しの乳房やわき腹、頬や尻たぶなど、あらゆる場所に擦りつけられる。

えっちシーン試し読み
ここからスタート!

なにしろゴーストは重力を無視して、宙に浮くことができるため、体位など自由自在だ。ゴーストの一体が空中を滑るように移動する。

黒いブラジャーがずり落ちてほとんど丸出しになっている胸元にペニスを突きつけた。もぎたてのメロンを思わせる双乳の谷間に屹立した器官を挟みこみ、パイズリを強要する。

「んっ、ぐ、ううっ……ちゅ、ちゅぷぅ……」

これだけ大勢のゴーストに囲まれ、さらに背後からは肉の楔で射抜かれていては、イレーネには抵抗のしようがない。

おぞましい悪霊の性器に、清純な乙女の乳房で肉奉仕させられるという屈辱――。

イレーネは奥歯を噛みしめ、その屈辱に耐えた。

摩擦の勢いで先走りの液が飛び散り、美しい乳房にべっとりと付着する。テラテラと輝く液が光沢を放ち、乳房の丸みにより立体感を持たせる。

無垢な肌を汚されたような視覚効果が、屈辱感を倍加させた。

さらに別のゴーストがイレーネの背後に回りこみ、尻の谷間に沿って肉棒の切っ先を滑らせると、その奥に向かってねじ入れてきた。

「ま、待って、そこは違――あぁぁぁ、あうんっ!?」

イレーネは口に頬張っていたゴーストのペニスを吐き出し、狼狽の叫びを上げる。

本来なら排泄のために使う窄まりをブヨブヨとした独特の触感が押し開き、直腸の粘膜を拡張しながら押し入ってきたのだ。
アナルへの予想外の侵入にイレーネは呆然と動きを止める。
膣に入っている妖魔のペニスに比べれば柔らかく伸縮性のあるペニスは、括約筋の抵抗をすり抜けるようにして奥へ、奥へと突き進んでいく。
「あああっ、お尻、ダメぇ……！　き、きつ、い……ああうっ」
ずる、ずる、と太いものが直腸を通り抜けていく感触は、排泄の快感にも似て、イレーネの官能を甘く揺さぶる。
ずぶりっ……！
未通の肛門を根元まで貫かれた退魔師少女は、びくん、びくん、と背中を大きく仰け反らせた。
「はあ、はあ……嫌、お尻の、なか……広がって……んぐっ⁉」
しかしアナルの処女を奪われた悲哀に浸る間もなく、ふたたび唇を割ってゴーストの男根が差し入れられる、
ぐちゅっ、ぐちゅっ、ずぷっ、ずぶぶぅっ、ぱんっ、ぱんっ！
三つの穴を同時に貫かれた状態で連続ピストンを浴びせられた。
破瓜のとき以上の衝撃で崩れ落ちそうになる体を、イレーネは四肢を踏ん張ってなんと

か耐えた。少しでも気を抜けば、快感と脱力感で倒れ、そのまま二度と立ち上がれないかもしれない。

（負けちゃダメ……妖魔やゴーストなんかにっ）

そんなイレーネの克己心（こっきしん）を試すかのように、妖魔はストロークを強めて女子校生退魔師の秘肉を野太い男根で嬲ってきた。

さらにゴーストも体をうねらせて、肛門への出し入れを強める。

膣を埋め尽くす剛棒とアナルに潜りこんでいる細く柔らかなペニスが、薄い膜を通してぶつかり合う異様な感触。

背筋がゾッとするような感覚に声を上げそうになるが、しかし口の中に頬張らされているゴーストの肉茎がその声を封じてしまう。

「んぐぅ、ぐっ、んむむむっ……ふぅ、うんっ……！」

くぐもった声を漏らしながら、白い肢体を艶めかしくよじらせる美少女退魔師。

膣を、アナルを、口を、ペニスで突かれ、えぐられるたびに、理性が薄れて意識が蕩けていく。

まるで全身が性感帯になってしまったかのような――。

「いやっ、こんな……どうして、あたし、こんなに……はうんっ、い、イイ！　気持ちいいよぉ……うあぁっ、あんっ、ふあぁっ！」

「カカカ、初めてでここまで乱れるとは……とんだ淫乱退魔師もあったものだな！」
背後からの高笑いにも反論できなかった。
おおおおんっ！
アナルを犯しているゴーストが歓びの声を上げて、ぶよぶよとしたペニスを拡張されたばかりの腸管に繰りこんでくる。
口を犯しているゴーストは喜悦の笑みを浮かべて、深々と男茎を打ちこむ。
乳房を犯しているゴーストも肉根の往復運動を速め、他のゴーストたちも、頬や二の腕、わき腹や尻肉などに性器を擦りつけてくる。
すでに精液を断続的に放っているゴーストもいるらしく、イレーネの周囲でプンと生臭い匂いが漂ってきた。
平常心ならば気色の悪さしか感じないような、栗の花に似た強烈な匂い。
しかし今の異常なシチュエーションでは、違う。
その匂いすらもが、イレーネに倒錯的な興奮を与え、初体験を終えたばかりの初々しい女体を高ぶらせていく。
（気持ちいい……気持ちいいっ……！　どうしてこんなに――あたし、おかしくなっちゃったの……!?）
イレーネは混乱の極致で美しい金髪を振り乱しながら、断続的に喘いだ。

「ああっ、うあ、んっ……熱い……体、が……ダメ、溶けちゃいそうっ……！」

意識が蕩け、性悦に溶けていく。

美少女退魔師の乱れる姿がゴーストたちの欲情の限界点を超えさせる。

どぴゅっ、どぴゅぴゅっ、びゅくっ、どぷんっ！　どぶるぅぅぅぅぅぅぅっ！

ゴーストたちがいっせいに精を放ち、白濁色をした大量の粘液がシャワーとなってイレーネの全身に降り注いだ。

どぴゅっ、どぴゅぴゅっ、びゅくっ、どぷんっ！　どぶるぅぅぅぅぅぅぅっ！

「ああっ……！」

あちこちが切り裂かれた白い制服や黒い下着が、露出した乳房や尻が、そして美しい金色の髪までもが……ドロドロとしたザーメンによって汚されていく。

「ああ……すごい精液、いっぱい……なんて熱い……！」

本来なら彼女の敵ではない下等なゴーストたちに嬲られ、体中に汚辱の粘液を浴びる屈辱感。

愉快げに半透明の体を揺らすゴーストたちから「この女、ザーメン浴びて喜んでやがるぜ」とでも嘲笑されているように思えた。

しかしそれが美少女退魔師の被虐に火をつける。倒錯的な官能すら感じて肉悦がさらに燃え盛る。体中が火照って火照ってたまらない。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/